

三月の人形揃瑠璃



四月の格闘

文楽座

日念記軍陸日十月三



撃ちして
止まむ

三日月の形浄瑠璃

—演出總形人・線味三・夫木—

(夜の部)

お傳 俊 近頃河原の達引
 傳兵衛 堀川 條河原のの段
 本朝 廿四孝のの段
 鶴澤道八 振作 付曲
 模茂都陸平 振作 付曲
 新曲三人片輪

(晝の部)

近江源氏先陣館
 和兵衛 秀盛 上使のの段
 小四郎 恩愛のの段
 佐々木盛綱 首實験のの段
 陸軍航空総監本部監修
 西澤作詞並二作曲
 大塚克三 舞臺裝置
 松平新次郎 舞臺照明
 陸軍記念日ニ因テ
 梅川 忠兵衛 壯烈荒鷲魂
 冥途の飛脚
 淡路 路町 落屋内のの段
 新羽織 封切のの段

・御観覧料・

昭和十九年三月一日初日
 初日 十一時・夜四時二部
 毎日 十二時・夜五時 開演

晝の部
 一等席 二圓四十五錢
 二等席 一圓二十錢
 三等席 五錢
 (各等入場税別)

夜の部
 一等席 二圓四十五錢
 二等席 一圓二十錢
 三等席 五錢
 (各等入場税別)

一等御座席 五日前より
 前賣切符發賣致し居ます

前賣切符專用電話
 南(75) 四七 七番
 一般御用の電話
 南(75) 三〇 三八番



(畫の部)

近江源氏先陣館

和田兵衛上使の段

和田兵衛秀盛上使の段

佐々木盛綱

竹本叶太夫

母 微妙

〔豊〕竹本富太夫

妻 早瀬

〔竹〕竹本津磨太夫

一子 小三郎

〔竹〕竹本濱太夫

一子 小四郎

〔竹〕竹本津磨太夫

乙 近し 齋元

〔豊〕竹本松島太夫

和田兵衛秀盛

〔竹〕竹本七五三太夫

國伊三改め

鶴澤友松

此の淨瑠璃は明和六年十二月の竹本座に於きまして始めて演ぜられ
ましたもので、作者は近松半三、八尾平七、三好松洛竹本三郎兵衛で有
ります。

梗概

頼朝歿後本妻腹の實朝側と側室宇治の方の腹の頼
家側とが確執を生じ戦端を開く。實朝の後見は母方
祖父に當る北條時政で阪本城内には大江入道を問者

人形役割

後室 微妙 吉田 小兵吉

妻 早瀬 桐竹 紋司

一子 小三郎 吉田 光次

一子 小四郎 吉田 玉男

佐々木盛綱 吉田 玉助

和田兵衛秀盛 桐竹 龜松

軍兵 大ぜい

小四郎 恩愛の段

切 豊竹 本重 太夫 助

佐々木盛綱 首實驗の段

切 鶴竹 本大隅 太夫 八

として藤澤藏人等と奸計を企んで先君の遺孤宇治の方、頼家母子を無きものにせんとする。軍師に木高綱と呼ぶ智將が招かれる、片岡造酒頭は源家の頼家と北條の鬼時姫とを縁組させて天下安穩を計つたが、時姫は三浦之助に戀してゐるので片岡の娘が身替りに死ぬ。片岡は爲に二心ありと見られ、何れへも味方せずと歸國す。四斗兵衛と呼ばれた和田兵衛秀盛は智略すぐれた軍師であるが浪人して毎日酒びたり、天下の形勢を觀望をして居る片岡に頼まれて鎌倉の大將北條時政の息女時姫を預かつてゐたが、時姫の戀人三浦之助は阪本方で鹽賣長次と身。やつして、和田を上使に招きに來る、和田は承知する、此の段は是より始まるのであります。此の度演じます和田兵衛上使の段は八つめの口、盛綱首實驗の段は同じく切となつてゐるのであります

人形役割

盛綱首實驗の段

梗概

佐々木盛綱	吉田玉助
後室 微妙	吉田小兵吉
妻 篝火	吉田榮三郎
妻 早瀬	桐竹紋司
一子 小四郎	吉田玉男
註 進	桐竹紋昇
一子 小三郎	吉田光次
二度の註進	吉田光造
北條 時政	吉田玉徳
古郡新左衛門	吉田兵次
竹の下孫八	吉田藤一
棟 吉十郎	吉田萬次郎
和田兵衛秀盛	桐竹龜松

佐々木盛綱は鎌倉方、兄の高綱は阪本方とと敵味方に別れた。石山の合戦に初陣の功名を争つた高綱の一子小四郎は盛綱の子小三郎の爲に生捕られた盛綱の陣所にひかれる。阪本方の敗戦で高綱は討死と噂、首は時政公の御前で弟盛綱に眞偽の實驗に供される。それは七人の影武者をつかふといふ高綱の偽首であつたが高綱の一子小四郎が母がかり火と謀合せて、誠らしく首に取つて切腹する、あまりのいたはしさにひかれて盛綱は時政公を欺いて高綱の首に相違ないと言ひ切る。君を欺いた盛綱は切腹を覺悟したが和田兵衛に止められ、最後に實朝と頼家が目出度和睦する



陸軍航空総監本部監修
西亭作詞並に作曲

大塚克三舞臺裝置
松平新次郎舞臺照明

陸軍記念日に因て

壯烈荒鷲魂 四 場

竹本相生太夫
野澤吉五郎
野澤吉三郎

人形役割

淀中隊長	吉田玉市
木田準尉	吉田光造
阪口曹長	桐竹紋昇
中川曹長	吉田玉男
關一等兵	桐竹紋太郎
東一等兵	吉田藤一

秋空冷氣烈しくて、肌骨にしみる蒙古の野、沸る戦意の勇魂に休む閑さへ荒鷲の昨日は北西に奮戦し今日南東に敢闘す、轉戦ここに幾ヶ月武名は高く天翔ける其の名も無敵旋部隊、幕舎の内に端然と挺立し餘念の中隊長折しも曹長中川響より先きにつけ來たり

中川曹長「中隊長殿、報告」

中隊長「中川曹長何か」

中川「ハッ只今木田准尉殿が歸つて來られました」

中隊長「ナニ木田が歸隊した」

中川「はい只今ここへ來られますが自分はまだ嬉しいので先がけして報告に參りました終り」

中隊長「そうか、それはよかった、御苦労」

と言葉の内に來田准尉、急ぎ足にて入り來り突如の内に暴走の禮

木田准尉「木田准尉、只今歸隊致しました」

中隊長 「ヲよく歸つた、もう良いのか」

木田 「ハッ思はぬ病院生活、いたらぬ自分の不覺より中隊長殿にも

戰友にもいろいろ御心配おかけして申謝ありません」

中隊長 「イヤ任務の負傷に多量の出血いやが、お前を無理に後送した

のだ謝る事はないしかし木田まだ少し顔色がよくない様じや
完全に軍醫の敷るしを得て歸つたのだ」

木田 「ハッ完全に、完全に軍醫殿のお敷しを得て歸りました間違

ひありません」

中隊長 「木田何だか怪しいぞ」

木田 「イエイエ決して怪しくありません、實際、誠、誠實、ほんと

うであります」

中隊長 「ハハハハ多くん並べたなマアよい、二三日は落ちついて

休養だ」

木田 「イヤそれは困ります、今日にも出動命令があれば即刻参加さ

せて戴きます、デないと自分の心が赦しません」

中隊長 「お前が赦さいでも、おれが許す」

木田 「イエ中隊長殿、それは……」

中隊長 「マアよい、下つて休め、中川曹長ここでは美味い物とて無い

だろうが、何か強かいものでも調達してやれ」

と、いつに燃らぬ強情の囁る言葉に木田准尉、固く中川も其

々にこれを目に汗く瀧の玉廻し瀧の一喝

中川 「中隊長殿、御言葉有難く、中川も御禮申します、準備第一先
づ彼方でお歸さすさい、サア参りませう」

と言はれてハッと木田准尉さすが強者も構けには禮の言葉も

涙にて得言はぬ心舉手の禮親と飄へる子心の靜々として出で
て行く、後見送りて又地圖に黙然しばし淀大尉、思ひ半ばの

外面より息もいき關上等兵慌しく走り入り

關上等兵 「中隊長殿部隊命令であります」

中隊長 「ようし、敵騎兵部隊撃滅に本隊は直ちに出動すると返信せ

い」

關 「ハイ復唱、敵騎兵部隊撃滅に本隊は直ちに行動と、返信いた

します」

中隊長 「よし、それから坂口曹長を直ちに呼びにやれ」

關 「ハッ

と心も身も關上等兵禮を残して走り行く、間もなく来る坂口

曹長、は入るや否や淀大尉

中隊長 「坂口曹長」

坂口曹長 「ハッ」

中隊長 「出動準備は」

坂口 「ハッ完了いたしました」

中隊長 「よし、万遍漏なき様、勸注意せい」

坂口 「ハッ」

と命じ終るや手はしかく出動準備の忙殺に部隊俄かに活氣つ
き亂れ入り交ふ足音も心もせきに木田准尉あつたが如く走り

入り

木田 「中隊長殿、お願ひでございます」

中隊長 「木田が改まつて何か」

木田 「ハッ、只今攻撃命令が下りましたが、自分は編隊に入つて居りません、是非御同行願ひます」

中隊長 「木田悪く思ふな、お前は追従今日歸隊したばかりだ、まだ顔

色も元の通りではない、今日の所は、ジツと休養を取れ」

木田 「お言葉返す譯ではありませんが、木田は只今より、もう傷病

兵ではありません原隊に戻れば即戦闘員立派に働けます、是非参加の御許しを願ひます、退院歸隊の途路も今日からは戦

友達とも元通り、一所に樂しく空を馳せ航空戦士の本分が盡

せると、其の喜びのみでした、中隊長殿どうか御願ひいたし

ます」

中隊長 「木田、軍人として航空戦士として、お前のその至純な心は諒

とする、が、戦闘は今日限りではないのだ、まだまだこれか

らいくらでも御奉公が出来る、お前のその旺盛なる精神はわ

しの分とそのまま二人分働いて来てやる、まあ二三日英氣を

増ひ然して次回にうんと頑張れ」

と、部下を勇はる上官の言葉は親身内親の慈愛に勝る慈愛な

り

木田 「中隊長殿、御懇情の一々木田身にしみて深く感銘いたし居り

ます、そのお心に對し返す言葉も非禮とは存じて居りますが、

今日ばかりはまけてお聞き入れ願ひたいのであります、中隊長殿、これを御覽下さい」

取り出す寫眞一葉を大尉の前に差し出せば中隊長は手に取

り上げ打ちながめて不審顔

中隊長 「これは少年の寫眞だが一體何か」

木田 「ハイそれは、自分と同年輩の者生れた時より隣り同士に隣ち

小學校も一年より同級同席兄弟以上に親しみました西川幸一

と云ふなつかしい幼友達であります」

中隊長 「フムそふして、それがどうしたのか」

木田 「ハイ、その西川は小さい時から何よりも兵隊と飛行機が好き

でした、いつも口ぐせに、僕は兵隊さんになつて、そして飛

行機に乗つてあの高い青い空を飛び廻るんだと、自分の口で

ブンブン言ひながら走り廻り私と共によく遊んだものでした

それが小學校卒業前の終學旅行より歸ると道々風邪に冒され

病床につきました、子供心に私は、自分の無二の友達とその

病床の姿が悲しく學校終ると毎日かかす、枕元に座つて本

を讀んでやつたり、其の日其日の學校での出来事を話してや

つたり、好きなすきな飛行機の話をしおふたりしていろい

ろと元氣をつけて居たのでした、高熱にうかされてのうわ言

にも又しても飛行機の事はかり口走り、言ひ続け、とふ

とふそれなりに、つひに永久に歸らぬ者となりました、あの

時の西川の心情を思ふにつけ自分は飛行機にのる度毎、いつ

もその寫眞に對し西川、それ、飛行機にのる人だぞ、と、言

ひながら一所に乗つて居ります、中隊長殿その寫眞の裏を御

覽下さい、

話しの始終中隊長默然として居たりしが言はれて見入る裏面

の文字うるむ目頭しはたたき

中隊長 西川幸一、大正十二年十月十九日没、これがその少年の命日じ

やの」

木田 「ハイ、中隊長殿ッ……命日であります、命日であります、大

正、昭和と變りこそすれ、年も同じき十二年、月も同じく、十月、日も同じ十九日であります、中隊長殿、奇しくもこの日歸隊が叶ひ、またその今攻撃命令が下つたのです、屬員も共々歸隊日の初出陣、中隊長殿、どうかと云ふ御件をお願いいたします」

と溢れる誠、友想と眞實眞意切々に語るも涙聞くも亦涙によどむ、淀大尉思はずほろり一滴の響うるませて

「木田、解つたよく言つた、立派な親友だ、屬員もきつときつと喜んでゐるだらう、本懐だらう攻撃に参加許す急いで準備せよ」

「ハッ有難うございます、中隊長殿、アア有難うございます」と天にも昇る喜びは直ぐにそのまま攻撃の心とこそは飛び行かん

中隊長

木田

第二場 (紗幕の外にてよし)

時、これ昭和十二年寒氣身にしむ十月の下旬に氷る晴芝を踏みしだき立つ淀大尉

「命令、敵の騎兵大部隊は包圍西北約六十軒附近を逃走中なり我が部隊は、直ちに出勤之を撃滅せんとす木田准尉は第二編隊長中隊長は第一編隊を直接指揮す終り。休め、出發にあたり一言注意す、お前等は、航空精神の本分を發揮し、部隊の名譽にかけて奮つて敵撃滅を期せよ、出撃の都度毎回言ふ事であるが如何なる事態に至るとも任務遂行を第一とし敢然と戦ひ、各自最悪の場合と云へども悠久の大義に生くる皇國精神の發揚に帝國無敵荒鷲の本分を全ふせよ終り、出發ッ、

(これにて一同はいはる紗幕其のまゝ)

(紗幕下りる)

命令一下勇士達互ひに決す必滅の意氣高らかに爆音は、驕野に響ひ勇ましき、

第三場

紗幕外より照明内部に飛行機、ばんやりと見える程度、飛行機を飛ばすこと

それ一天雲もなし、眼下に延びる大黃河流るる、音の聞かずとも滔々として響くるなき舞臺を隔れの戦闘機、稍刻移り前方に見つけし必敵大部隊忽ち肉迫大攻撃時に無念や敵弾を受けしと見えて隊長機次第次第に低下して畑地に着陸轉覆すそれと二瞬木田准尉見れば敵前四五百米などが放置の出来得べきと危險を冒し出救に敢然降下着陸す

ト、これにの紗幕おとす木田機着陸せし文、同の戦前紗幕落す上手より切出しにて轉覆の隊長機部分的見せる

その後より隊長を抱えて出づる心組

直ぐにかけ寄り隊長を抱きかかへて窪地に連れ進め隊長は大驚耳に口

「中隊長殿しつかりして下さい、木田准尉です、中隊長殿

中隊長殿

と呼べと矢神顔面鮮血流れ出るにぞ手早く白布取出し即座の手當間もなく近寄る敵の騎騎の音、彈は身近く落ち来るにぞ准尉は前方きつと見て

「來たな、敵兵、折角中隊長殿をお救ひしながら事これにて終るは残念、我死す事いとはねど重傷の中隊長殿むさむさ敵手に委ねんは無念至極」

木田

木田

と顔を喰ひしめ即應戦の怒りの眼、時しもあれ槍機中川坂口の果敢の降下低空の掩護射撃に敵兵は算をみだして逃げ走る木田は思はず大空にひびけと斗り響張り上げ

「オツ中川、坂口、中隊長殿を我機にお救けするまで其の間掩護射撃を頼んだぞ」

と固かめ聲も一心に我身を捨て隊長を只救出の誠なれ早との間に木田雄尉又はせよと響限り

「中隊長殿、中隊長殿」

と呼ぶ至誠の通じてか、うんと一息吹き返せば

「オツ氣がつかれましたか中隊長殿木田です、木田雄尉です」

「ウツオツ木田か」

「ハイ木田です、しつかりして下さい」

「ウツ残念」

木田

中隊長

中隊長

「イヤ傷は浅いです、しつかりして、中隊長殿、操縦は出来ま
すか、出来れば自分の飛行機で歸して下さい、自分は壯健、ど
うともなります、後の事は御心配なく一刻も早く自分の飛行
機で歸して下さい、中隊長殿、操縦は出来ましかエツ、操縦は」

「ウツア駄目だ、この重傷では不可能だ、おれにかまわず行け
行け」

とぐつたり崩れるその有様、雄尉はハッと當惑の様如何にせん此の場の仕義、隊長操縦出来得れば我が愛機にて乗せ歸らせ我は敢然踏み止まり盾と敵らんと思ひしに操縦ならぬ中隊長殿、如何にいたして救出の手だても何と此場合愛機は單座身は二人敵は三方は至近、心は千々と軋れ撃つ、今は躊躇の時ならず、隊長曹員と共に運にまかせて離陸せんと決然として意を固め

木田

「中隊長殿、敵は益々至近です、僚機の弾も盡きた様です、ぐずぐずする場合には有りません、如何ともし共々に運にまかせて離陸しませうサ早く早く」

と抱き起せば中隊長

中隊長

「木田捨て置けツ、志は感謝するがおれにかまはず任務遂行に務めよ、懸圖ついて居て共に敵手に倒れるな木田、出發前の注意を忘れたか、お前にはまだ使命があらう、我身は武運拙くしてたとへ此場に倒れるとも任務に死するは武人の本懐足手まといぬおれにかまはず、一時も早く離陸せよ、サ行け行け」

木田

「イエたとへおしかり愛くると云部下として上官を見殺す事は其の罪万死に償います、軍人の本分にも悖ります

アアそれ、懸圖懸圖しては又敵がサ早く早く」

と言ふ間もあらず前方より又も撃ち出す敵彈両機今は瞬時
も争ひの間さへ何をか猶豫せん、御免と許り無理失理に中隊長
を我背へ父母に仕ふる子心の愛機に移るも虎口の難赤龍天に
通じけん神技の離陸高らかに歓呼は迎ふ基地部隊

第四場

基地はるか前方幕切にて日章旗鮮揚
大陸的な氣分を出す事よろしく

見よ、内蒙の空塵す爆音高き荒鷲の響れは世々に燦然と光り
輝く日章旗、世界に冠す無二の魂、これぞ、皇國精神の我が
日の本の寶なれ、我が荒鷲の精華なれ、

梅川 忠兵衛 冥途の飛脚

淡路町の段



浪華淡路町の飛脚問屋龜屋忠兵衛は新町龜屋の遊女梅川に迷つて金子に窮した揚句、西國方から廻つて三百兩の封印金を一時融通した事が詮議厳しくなり、遂に入牢仰せつけられたのが賣水上年十二月のこと忠兵衛は十日許りで牢死し、梅川は其後尼になつたとか。この事件は直に翌賣水八年正月京都の都万座の歌舞伎に上演され、これが近松門左衛門によつて脚色されたのは賣水八年三月大阪竹本座の攝津堀端に上場され現在に到つて居ります。

淡路町 龜屋内の段

竹本 七五三太夫

鶴澤 綱造

羽織 落しの段

鶴澤 友衛門

梗概

此處淡路町、龜屋の世繼忠兵衛は今年二十うへはまだ四年以前に大和より敷金を以つて養子分後家妙

人形役割

閑介抱を受取ります。

手代伊兵衛	侍甚内	八右衛門の使	母妙閑	龜屋忠兵衛	下女ま	丹波屋八右衛門	宰領	仲仕	馬方	新町封印切の段
吉田玉徳	吉田多三郎	吉田常次	桐竹政龜	吉田光造	桐竹紋司	吉田玉市	吉田駒三郎	大ぜい	大ぜい	

人形役割

丹波屋八右衛門	花戸車	鳴戸瀬	千代歳
吉田玉市	桐竹紋太郎	吉田龜次	吉田常夫
竹本南部太夫	鶴澤寛治郎	竹本伊達太夫	野澤喜左衛門

或日の事、店の者が町廻りの狀立歸つてそれノ、留帳附る所へ忠兵衛は宿に居るかと案内を願ふのは平日出入してゐる屋敷侍でした。侍の來た用件は、江戸より「來月二日出の三度に、金子三百兩差登せ申べぐ候、九月十日兩日の内、其地龜屋忠兵衛方より三百兩受取り内々申置候事共埒明け申べく候間金子受取次第此證文忠兵衛に渡し申さるべく候」これ此通り云つて來て居るのに未に届うした事と物凄く權幕で、忠兵衛が低身低頭して謝るのですが、刀の威光に物云せて罵言して歸るのでした。

忠兵衛が此頃の素振りは、さうも存込めぬ、近頃のものを知るまいが、忠兵衛は槌屋の實子ではないし、元は大和新口村勝木孫右衛門と云ふ大百姓の一人子で、繼母育ちの悪性だから、狂ひも出来る事だ

らう。

養子の母も忠兵衛に異見したい事もあるのですが
せわ／＼言ふより言はぬ身を恥いうせふと目をねぶ
つて居るのです。

新町封印切の段

浪華十八軒の飛脚屋の鑓と言はれた龜屋の養子忠
兵衛は新口村の大百姓孫右衛門の倅、ふと新町の邸
に足を踏み入れて槌屋の梅川と馴れ染めたのが身の
因果、店の金を使ひ込む果は爲替金にも手をつけ
て、諸方から添狀は着いたが銀が届かぬと言ふ矢の

催促。丹後屋の八右衛門も江戸爲替の五十兩が十日
餘りも埒が明かぬと嚴談に來たが、忠兵衛が梅川身
請の手詰の金と知つて八右衛門も勇氣を出し、母親
妙閑の手前、僞金を掴んで得心して歸へる。やがて

江戸から届いた、三百兩の爲替金を忠兵衛は堂島の
御邸へ持參する爲、米屋町の四辻迄來ると、むら
／＼と氣が變つて新町の梅川の許へ足を運ぶ。其處
には八右衛門も居合せて、忠兵衛を惡所に近づけぬ
意見の爲に散々な罵言雜言、忠兵衛は金が無いと言
はれた口惜まぎれに、前後の辨へもなく懷中の三百
兩の封印を切り、五十兩を八右衛門にたゞきつけ、
後の金で梅川身請の拂を濟ます。今は封印切りの大
罪人、忠兵衛は梅川と手に手を取つて駈落し一先つ
新口村の孫右衛門と此の世の暇乞ひをして死に場所
を求めに行く。



(夜の部)

おしん 傳兵衛 近頃河原の達引

四條河原の段
堀川猿廻しの段

四條河原の段

竹本 雛太夫
鶴澤 友松
國三改め

人形役割

横淵官左衛門
井筒屋傳兵衛
廻しの久八
駕かき
吉田 玉徳
吉田 榮三
桐竹 紋昇
大ぜい

「それや勘えませぬ傳兵衛さん」で有名なこの淨瑠璃は、その實、作られ、時も、作者も未だ詳でない。天明五年五月五日（二四四五）から正戸の肥前座で上演された時の正本の作者として爲川宗輔、簡井半二、齋河七五三助があげられてゐるのは恐らく既作品に少々筆を加へたものであつて、この事はこれより先き天明二年には江戸外記座で八重太夫が堀川の段を踊り、天明三年には大阪北堀江座で、同じく八重太夫が堀川を踊つたといふ記録が残つてゐる事から推して考へられる。とも角、本曲は上中下三卷六段からなり、堀川の段はその中之巻に當る。そしてこの全曲は新作と呼ぶに憚る様な成立過程をもつてゐる。即ち本曲より以前に作られた有名な二つの淨瑠璃——明和元年五月（二四四二）竹本座上場、「京羽二重婿氣鬘」近松半二、竹本三郎兵衛作、ならびに明和五年十二月、北堀江座上演、「紙子仕立面直露」富原助作——から大たいの構造、詞章まで借用して資木細工式につくりあげられた作品である。更にその素材となつた實説も正確には分らない。だが普通よく説かれてゐるのは天文三年（二三九八）中に京都で起つた三つの事件即ち異服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の扱ひお俊の聖護院の森の情死事件（十一月十六日）、四條河原に於ける公卿侍と、所司代の下部との刃傷沙汰（十一月十三日）、堀川に住む猿廻し丹波屋作吉が孝子として表彰された事（九月廿七日）を取入れて脚色したといふ説が廣く行はれてゐる。

堀川猿廻しの段

梗概

豊竹 豊竹 仙太 夫
竹本 澤 二 郎
鶴澤 清 二 郎
ツレ 野澤 八 造

人形役割

與次郎の母 吉田小兵吉

弟子おつる 吉田玉男

兄與次郎 桐竹紋十郎

娘おしゆん 吉田光造

井筒屋傳兵衛 吉田榮三郎

冬ざれて川風寒く吹きすさぶ四條河原の夜。傳兵衛の戀人おしゆんに横戀慕の横淵官左衛門は、主家の寶物詮議中の傳兵衛を、寶物一件にかこつけて此處へ誘ひ出し殺してしまはうと悪企みをしてゐた。

そんな事とは露知らぬ傳兵衛は官左衛門が持つてゐると云ふ寶物を譲つて呉れと頼みに頼む。然し官左衛門は河原の石に叩きつけて寶物の茶入れを打ち壊し、その上、傳兵衛を殺しておしゆんを我がものにすると罵る。

今はたまりかねた傳兵衛。最早これまでと官左衛門に斬りつける。そして石に滑つた官左衛門を殺してしまつた。

犯した罪に傳兵衛は自害しようとする。然し折柄

付け付けた久八の計ひでこの場を落ちる事になる。

それから數日經つた。

おしゆんの母は京の堀川邊に住居して琴三味線を教へ、長男の與次郎は猿廻しとなつて貧う暮してゐる。師走の十五日、教へ兒のおつるが習ひに來たので、鳥邊山の唄の三味線を教へて歸す。日暮前に與次郎は小風呂敷を持ち猿を肩に載せて戻り、盲目の母をいたはつて慰めた。母は「廓の主人が娘を連れて來て、おしゆんに戀仲の傳兵衛が人殺しをした爲おしゆんを内に置き難く、さうぞ傳兵衛に逢はせぬやうに置まつてくれと言うて歸つた」と、語つて嘆いた。

與次郎は往來の人に聞かれぬやうに門口を鎖しおしゆんを呼んで母と共に懇に諭し、傳兵衛との縁切り狀を書かせたが、母は盲目、兄は無筆であるから

何を書いたか知らねども、おしゆんが氣休めの言葉に安心して三人共に寢所に入つた。

夜更けて傳兵衛は、おしゆんを尋ねて來て戸を叩いた。寝ないでゐたおしゆんは飛び出て「傳兵衛様よう逢ひに來て下さつた」と、言ひなが戸を明けた音に、母も兄も目を覺す。臆病者の兄はあわてゝ暗紛れに取違へて、おしゆんを締出し傳兵衛を内に入れ、燈火を體して見れば傳兵衛であるのに驚き、おしゆんの縁切り狀を突付けた。傳兵衛は怨しげに之を受取つて讀めば、女を守るべき道を説き、傳兵衛と共に死ぬ覺悟を述べ、さうぞ不孝の罪をお赦して下さいと、こまごまと記した書置である。三人ともはつとたまけ「さてはさうした心であつたか」と、與次郎は急いで娘を引入れる。

傳兵衛は「わしをさうまで思うてくれるか奈いあ

前はお二人の爲に生き長らへて、我が死後の弔を頼む」と泣けば、おしゆんは「そりや聞えませぬ傳兵衛様」と、女を守る道を語つて自殺しようとする。

母も與次郎も之を押止め、娘の貞心に感じて傳兵衛に任せ「二人共逃げられるだけは逃けて、死なずにゐてくれ」と別れを悲しむ。

與次郎は傳兵衛に編笠を與へて姿を變へさせ、門出の祝として酒を酌み交し、猿廻しの唄を歌うて猿を舞はし、互に此の世の見納めと名残りを惜しむ。かくておしゆん、傳兵衛は母と兄とに見送られ、聖護院の森をさして出でて行く。

流言蜚語は信念の弱き生に

惑ふところ勿れ　動ずるところ勿れ

(戰陣訓)

通し本朝廿四孝

景勝下駄の段

山本勘助住家の段



景勝下駄の段

竹本住太夫
鶴澤重造

人形役割割

女房	お種	吉田文五郎
弟	慈悲藏	桐竹龜松
母	越路	吉田榮三
長尾	景勝	桐竹政三
伴	次良	桐竹紋二郎
百	姓	大ぜい
奴		大ぜい

明和三年正月(二四二六)竹本座初演。作者には近松半二、三好松落、竹田因幡、竹田小出、竹田半七、竹本三郎兵衛等が名を列ね、全五段に分れ、殊に、第四の切「十種香の段」が名高い。所謂甲越の戦を題材とした大近松作「信州川中島合戦」(享保六年八月「三八」)竹本座初演)に基き技巧を凝らしたもので、武田、上杉両家の確執に足利將軍を殺した彌藤道三の謀略を取合せた。大體の筋は、二段目は武田の奥家老板垣兵部が單力養作を助けたり、長尾の家來を殺した無頼漢横藏が思ふ仔細あるらしい養勝に看された後、異形の老人即ち彌藤道三に養作を興へられて再會を約したりする義助明神社頭の件から義助暗殺後曰に三年を経過したが、未だに聞者が分らぬ爲、村上善清が勝頼の首受取に乘込むので、信玄の室は盲目の勝頼と戀人の濃衣を逃がさうとするが義清に見破られて勝頼は自殺する。其處へ、勝頼に生寫の養作を身代に連れて來た板垣兵部、曰に勝頼が自害した後なので、縊つて養作を斬らうとするが、養作實は眞の勝頼で、死んだ勝頼は實は兵部が子、つまり兵部が己が子、勝頼を取替で、眞の勝頼を養作として信濃へ追遣り、武田家横領を狙つて居たも、で其逆心を知つた信玄の爲めに兵部は刺され勝頼の養作は身のを爲つたまま濃衣と共に法廷の兇の證議に立立つの慘境です。

山本勘助住家の段

景勝下駄の段

切 豊竹古靱太夫

鶴澤清六

人形役割

母	越路	吉田榮三
弟	慈悲藏	桐竹龜松
後	直江山城守	
女	房お種	吉田文五郎
兄	横藏	吉田玉助
後	山本勘助	
妻	唐織	桐竹紋司
倅	峰松	桐竹龜之輔
倅	次良吉	桐竹紋二郎

雪深い信濃路の山里。後に父の山本勘助を名乗る兄横藏は横道者だが、弟慈悲藏は孝心厚く、今日も母越路に食させやうと鯉を漁つて戻る。妻お種が抱いて居るのは兄横藏の子治郎吉で、老母への孝養の爲、邪魔になる我子峰松は慈悲藏が桔梗ヶ原へ捨てたのだが、お種に其子の行方を訊かれると、結構處へ養子に遣つた等と氣休めを言ふ。越後の長尾謙信の息景勝來たつて、戸外に窺ふと知るや知らずや、母越路は慈悲藏は雪見を止むるを怒り、鯉なご食べたう無い、裏の藪の筈でも掘つて來いと無理難題、當惑する慈悲藏を見て、父の名跡欲しさの偽孝行は有難うないと打擲する機に下駄が飛んだ。それを景勝拾つて越路に捧げ、横藏を家來にと所望し越路が

承知するので、白木の箱を主従の印に残して歸つて行きました。

勸助住家の段

木曾山木立荒くれた横藏が戻り、母に足を洗はせたり、腰を揉ませたりして居ると、武田信玄到着の知らせに次で、高坂彈正の妻唐織が峰松を抱いて來た。子を餌に慈悲藏を武田家へ召抱へ様とするが、慈悲藏は母の戒めに従つて仕官を斷り、裏手の藪へ筍掘りに行けば、種は戸口に捨られた峰松を抱き上げる。秘に様子を窺つて居つた唐織之れを見て、子供に乳房を含ますからは慈悲藏は信玄公へ御味方と呼ばはつて立去る間もなく手裏劍が飛び來たつて峰松の胸に立つた。それを横藏の所業と睨むお種。此

方は慈悲藏、竹箬で筍を掘つて居たが、鳩あまた集るを不思議に、六韜三略の巻が埋もれて居らうとも知れずと一心に掘返す。其處へ横藏窺ひ出て掘出だした小箱を奪ひ合つたが、誤つて池へ落す。二人の争ひを止めた越路は、改めて横藏に向ひ、面體似たる景勝の身代に立てと迫るが、横藏は聽ず逃出さんとし慈悲藏の手裏劍に膝を傷付けられると、九寸五分を取上げて右眼を突き、斯く疵付けられては身代りにもなるまい、父の名跡を襲いで山本勘助晴義、謙信の家來直江山城守種綱に言聞す事ありと呼ばはる、慈悲藏實は直江山城だつた。横藏は足利十三代の公達松壽丸を我子次郎吉として育てた仔細を語り信玄に頼まれたとて小箱を開けて白旗をも示した上傳授の一卷は母の姓を襲ぐ弟に渡し。後日戦場での勝負を約するのだした。

人 形 役 割

豊澤新三郎

鶴澤友平

鶴澤寛弘

（鶴澤寛治郎）
野澤喜左衛門

有 徳 人 吉田玉助

吉田榮三郎

目 桐竹紋司

亞 盲 翳 有 桐竹紋十郎

しんの闇、杖つきの字あゆみかね、心の月は囀るれ共、囀れぬこの身の因果者、これにこりて其の後は、すっかり改心致しましたと、雨もつ空にうつつと、只うつむいてそ居たりける、「囀折から爰へきようきよう上羽ぬけの駕籠のそれならで合みすばらしげなるなりふりで、擔はぬ籠に札かけて囀の看板合押つけに、たどるのき端も縁のはし詞「アア 主人「これは囀と見ゆる、ふびんな者ぢや、コレコレをなたは高札の表によつてまゐつたか 囀「アア 主人「そなたは何として囀にならしたつた 囀「アアそも我れ等が身の上は、彼の島原の廓にて夜毎浮かるる客衆を世辭で丸めて口車、合うてうてんつくちりからの調子拍子に面白ふ、浮れ浮かれたむくひにて、今は因果のめぐり來て、アア行末のはつかしや 詞主人「いかにもふびんな者ぢや、此上は心をあらため、行末當家につかへませ、囀「ありがたうります、主人「是れはいかなこと、囀「がものを申した、ハテ何とした何であらうぞ、アアさつた、囀と申す者は、一代に二チ度囀しとかなしき時には、物を申すところけたまわる、おおかたそのことでござらう。のふのふそなたはあまりの嬌しさで、それで物が云はれましたか、郎助が、合嵐山から飛んで来るからす、羽根のつがひがうらやまし 詞「物もふ物もふ物もふ 主人「こんどは翳が参つた、すつとそちへ通りませ翳「ハア心得てござります、ヤアットナ ヤアットナ、エエ私は、高札の表についてまゐりました處でござります、何卒お召抱へ下されますれば

この上もなき仕合でござります。主人「いかに抱へよう抱へよう、シテそなたは、生れついでのはか、または中年よりの體であるか、和御寮の身の上話を聞かせい、是「しさいと申すも涙の種、過ぎ昔は肩衣に槍一ト筋の身なりしも、曲る心に身を持ち馴し、親の意見のうるさしと、腹立ちまされに藏かへせし、報ひはたちまちこの姿、天の御罰の恐ろしく、てんと改心致しましたと、身の行末のあぢきなさ聞。詞「扱ても扱ても和御寮は不仕合者ぢや、そのやうに改心致すと申すも、性は善なる人心、よいよい、今日より召抱へますぞ、暨「それはせんばんかたじけなや、偏に御助御助と、手を合せたる嬉し泣き、主人「うとく人も、目をすり赤め、詞「和御寮達の身の上断しを承り、思はず貴ひ泣きを致してござる、いよいよ此の方に抱へる上は、申つくる事とあると片へに置きし三寶の、上に乗せたる藏の鍵、三ツ揃へて持つて出で、詞「フウノウ某四五日留りにて山一ツあなたへ行程に、そなた達に留守を申付る、先づいつち先きに抱へたる座頭にきくが、此留守中を何として守護いたすぞ、盲人「ハイ私は御寮の如く、かい目見えませぬが、耳は至つてよろしく御座る、蟻のは音までもわかります、もの盗人などはいりしなれば、かならず人に知らせます。主人「ヲラ夫れでよいよい、シテ睡どの、そなたはいかがぢや、コレドウぢやと申すに、ヤこれはいしたり、そなたは蟻で有つたものをアハハハハイヤコレ睡どの、某は用事あつて、山一ツあなたへ四五日泊りでまゐる程に、留守中そなた

に藏の番を申附るが、いかが致して番をしますぞ。睡「アアア主人「何私は槍を心得て居りけすに依つて、盗人がまゐつたれば、一ト突きに突止めますア、ハハハハよしよし睡殿は何を心得居るぞ、睡「ハア私は十三足三伏せの矢に、五人張りの腰刀を抜きます、月の名人でござります、モシ盗人が来りなば、射落してお目にかけます。主人「成程月の大名人とが、ムム是は蟻でもさしつかへなく出来る事ぢや、まづ是でよいよい、此上申置く事は、ヲラそれ、早敷ければ三年あと、風雨はけしき闇の夜に合見越しの松を足踏となし合忍び入つたる數多の盜賊實藏目がけ入りこみしが合シヤとさかしき振舞と、たすき鉢巻身を固め合討つて出づれば合賊はいも、風に木の葉のちりちり々々と跡を見ずしてにけうせり、詞「何と某がうでの強さをかん心したが、暨、盲「驚き入りましてゐります、主人「よしよし然らば和御寮達に申付くるは某やがて戻る迄、座頭には寶物藏の鍵を預る、盲人「ハアかしこまつてゐります、主人「睡お前には、酒藏の鍵を預る、しつかり番をしませうぞ。睡「アアアアア主人「その次は蟻との、そなたは金藏の鍵をあづくる。睡「ハア心得てゐります。主人「諸々共にしかと申付けましたぞ。暨、盲「畏つてござります。盲人「やがてお戻り成されませ。主人「アア心得た。暨「お留守は御氣使ひなされますと、主人「詞にいそいそとく人、表をさして出て行く。三人「後に三人はホツと風つき、盲人詞「扱も扱も目のちが痛くたう成つた、是はチ

ト目を開けて睡臥を休めてくれう、ハアよい心持ぢや、夜が明けた様で此様にせいぜい致した事は御座らぬ。噫「エヘンエヘン久しぶりで口を利いたら咽喉がせいぜいと致して御座る。噫「初め抜も足がめりめり致した、ヤヤツトナアナア、よい心持ぢやと、グツトのはした足の先。三人「三人顔を見合はして、詞「アハハハハ、噫「太郎助どのか。噫「何ちや牛之本のにおまきさのかと、三人「あたりははかる者もなく、打くつういで高笑ひ、アハハハハハ、詞「アア是でいよいよ安心致した。言、噫「ヲヲそふ共ぞと共、盲人「シテ太郎助どの、何故諸家へ抱へられたぞ。言「それはいのう、藏公達も知つての通り、不仕合が續いたによつて、高れを見で片輪を思ひ付き、いさつて参つた、シテ藏公達には、盲人「私も一生寝て居て食はふと盲目になつて参つた。噫「私は又もと遊女であつた時、人をだましてほうだいに嘆古り散した其がわり、今度はだまつて食はふと思ひ、噫になつて來たわいな。噫「いよいよ是で安心なれば、盲人「銘々あつかりの藤を明け、久し振の大酒盛り。噫「命のせんだくしませうと、三人銘々うなづき三人連れ、藤まへさして入りにける。早や時も過ぎ銘々は、藤よりはこがすかすは、黄金の袋に寶物つば口には銘酒がエンヤヤ、二人があとおしエンヤヤ、さてちも重いぞエンヤヤエンヤヤエンヤヤえんや、三人詞「アハハハハハ、噫「此の様な銘酒が此の藤にあらうは此藤番は知らなんだわいな、なんと儲さん久しぶりのお酒盛、はじめませうではあるまいか。噫「それがよいそれがよい、まづ藤番のおまきさのから始めませう。噫「いよいよ是とこのより、噫「エエさよなだんなの藤等より下され

うが、ヲツト御座ります、ちりますグウグウグウグウ、ハアよい酒ぢやよい酒ぢや、アハハハハハはらははははは。盲人「エエそんなら吾等かエヘヘヘヘありがたいわアハハハハありがたいわ、ハハハハハハ、有難山吹舞が、のぞをくらしくつと吾、アア、うまいうまい、チウチウチウチウ、ハアよい酒ぢやよい酒ぢや、エイ、然らば噫、ササ、お酌をいたさう。噫「ヲホホそんなわたしもしよばんと互ひに盃とりかはし。盲人「さいつ、噫「おさへつ、噫「かつ重なりて、噫「どうと目、詞「ナナ何んと兩人、よい心持になつたぢやないか、さいづめ噫のおまきさのかくし、おさかなに所望ぢや、所望ぢや、噫「ヲホホヲホホ、そんなら私もはつかしながら昔おぼへし一ト振りを、盲人「よいやよいや、噫「サアサアサアサア、こん度は座頭どの、早と早や、盲人「アアアアアまづ待たせられ、エエうつと、ヲヲそれ歌見得ぬ盲目の至市このが、田舎まわりになれなれだが、すそをくわへてひきこす、噫ぢやれしやる淨名の種よ、戀に目のない通りのもの、はやし立てられはざされて、詞「よいやよいや、言、噫「サアサアサアこんどは噫どの、サアサア早と早や、噫「アアコレコレ、さなのたまひや、只今つかまつる、ヤヤヤヤヤヤヤやうとなふたまたふた五人の中へ、小町一人を僱正福閣合香めや唄へや座も曲も、見立てうつらう、文屋がはらふからに、どうか心も在原さんに思ひ出したらまつてうらうらま、合て間ならぬと藤を立つみに世を宇治山の、喜樂茶にしてちやツと來なせ、合ちよつとつむ合茶つみの合小唄おし、三人ササツツいたぞ。

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

○竹本座創立 (現今ヨリ二百五十九年以前)
貞享元年二月(道頓堀西ノ芝居)

○文樂座發祥 (現今ヨリ約百五十年以前)
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地演時代
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御禮神社内時代
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社續承
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御禮文樂座廢失
大正十五年十一月二十九日

○臨時興行時代
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨

時興行

○四ツ橋文樂座創立
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を
賜り厚く御禮申上ます

■文樂座は既に貴族御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人物・
歌舞の日本唯一の公演場である。

■文樂座人形端座は、實に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我日本に於ける
古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開
場毎にこの大使命が全う出来ずやう、貴族の御期待に背かぬ様、貴族
に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居ります。が尙御氣付
きの點は御客様の御座として承りたく存じます。

■貴座品は、各自にお持ち下さい。お席にお立ちのときは御携帶願ひます。

■お煙草は一階、一階廊下に喫煙臺を備へてあります。お煙草はぜひ此處でお
願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

■お食事は、西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

■お化粧とお手洗、取方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御
座ります。

■場内にて、寫眞撮影は絶對にお断り致します。

■御休憩の間は一階西側に給茶處と二階西側に大休憩所の設備が御座ります。辦
事御持参の御方は何卒御利用下さい。

■出演者病氣其他の事故にて出場不可能の場合は生勝手代役にて相勤めしますか
ら豫め御座承願ひます。

松竹株式會社 文樂座

支配人 大橋照夫

電話南〇三七八番

昭和十九年三月二十八日印刷
昭和十九年三月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹株式會社 大阪支店

編纂者 大阪市南區久左衛門町八
發行所 江崎也

一部 金二十錢

